

石上神宮所蔵 国宝 七支刀の X線CT画像の撮影に関する記者発表会

調査経緯

石上神宮に伝わる国宝・七支刀は、身の左右から三本ずつの枝刃を萌出させた特異な形状の剣（一般に両刃を「剣」、片刃を「刀」と区別しますが、呼称は様々）です。表裏面に計62文字分の金象嵌銘が施され、その内容からは、「泰□（和）四年（中国・東晋の太和4年：西暦369年にあてる説が有力）」に、百濟王（近肖古王）の世子（継承者、近仇首王）が倭王のために百兵を退ける力をもった七支刀を作った、との趣旨が読み取れます。史料の少ない4世紀における日韓交流の様子を伝える現存品であり、またおよそ1600年もの長期にわたる世界にもほぼ例をみない伝世品として、きわめて高い価値をもつ品です。

このたび、石上神宮のご配慮により、奈良国立博物館開館130年記念特別展「超 国宝－祈りのかがやき」（令和7年4月19日～6月15日）に、この七支刀のご出陳が叶いました。社外に出る貴重な機会に併せて、館内に備えたX線CT装置による撮影を行い、現在の保存状態の確認、いわば「健康診断」を実施いたしました。同時に、そのCT画像により、これまでの肉眼観察や写真では見えにくかった銘文を、一部でも鮮明化できれば幸いと期待もありました。なお、この調査は、明治期の石上神宮宮司、菅政友（かんまさとも：1824～1897）が七支刀の銘文を発見してからおよそ150年（明治6年〔1873〕宮司着任、神庫調査に着手し、ほどなく銘文発見と推定）という機縁をもって、石上神宮の特別なご配慮を頂いて実現したものでもあります。

現時点では、未だ画像調整・整理の途上段階にあり、詳細な検討はこれから時間をかけて検討して行かねばならない状況にあります。特別展において、七支刀の現品を観て頂く貴重な機会に併せて、今回の調査の概要をお知らせし、かけがえのない文化財への関心を高めて頂ければと思います。

調査概要

1. 撮影機材、撮影方法

奈良国立博物館の大型文化財用X線CT装置により全体を撮影しました。現在、七支刀は、その形状にそって削り抜かれた板材の中に収められ、表裏面にガラス板を張った木枠の中で保存されています。これらの保護枠の存在は、X線CTの撮影には支

障がないため、今回はそれらを外すことなく現状のまま撮影を行いました。

2. 調査成果

① 剣身の状態

- ・ 剣身の断面はおよそ稜のないレンズ形で、厚さは3～2ミリメートルと極めて薄いことがわかりました。
- ・ X線の透過度により判断するかがり、剣身本体に折損・崩壊に繋がるような大きな亀裂は認められませんでした（下方の断裂：〔下から2つ目の枝刃の直上にある折れ〕は明治以前のもの）。ただし、剣身や枝刃の縁辺部分はきわめて薄いため、従来指摘されている通りの危険性は残されています。

② 銘文に関する所見

- ・ 金象嵌銘の残存部分を明確に確認することができました（すでに公表されているX線透過写真では表裏面の象嵌銘が重なって写っていますが、CT画像では表面・裏面それぞれに銘文を写すことができました）。
- ・ 錆に隠れていた金象嵌の字画を確認できるものがありました（裏面「済」の最後の縦画など）。
- ・ 金象嵌が失われた鑿彫の字画も一部は確認ができますが、自然の表面剥離との判別が難しいことがわかりました。今後は、写真等と比較しながら慎重に判読する必要があります。

3. 今後の課題

今回の調査は七支刀の状態確認を目標としたものであり、今後の保存方法を検討する上での基礎情報が得られたことが大きな収穫です。

銘文に関しては、いまだ現状の確認段階であり、今後、専門家を交えて精査していきたいと考えています。

本リリースに関する問い合わせ先

「超 国宝－祈りのかがやき－」広報事務局
（ユース・プランニングセンター内） 担当：片山・池袋
TEL：03-6826-1245 FAX：03-6821-8869
E-mail：chokokuho2025@ypcpr.com
〒150-8551 東京都渋谷区桜丘町9-8 KN 渋谷ビル4F

参考資料

※銘文の読み方や解釈は諸説があるため、以下はあくまで参考として吉田晶氏の釈文、読み下し文、および意識文を掲げます。

吉田晶 2001年 『七支刀の謎を解く－四世紀後半の百済と倭』 新日本出版社

銘文釈文

(表) 泰□(和)四年十□(一)月十六日丙午正陽造百練□(鍔)七支刀□(出)辟百兵宜
供供侯王□□□□□(作)

(裏) 先世以来未有此刀百済王世□(子)奇生聖音故為倭王旨造伝示後世

読み下し文

(表) 泰和四年十□(一)月十六日丙午正陽、百練の鍔の七支刀を造る。出^すみては百兵を^さり、供供たる侯王に宜し。□□□□□(作)なり。

(裏) 先世以来、未だ此の刀有らず。百済王の世子、奇しくも聖音に生く。故に倭王の為に旨造し、後世に伝示す。

意識文

(表) 泰和四年(三六九)十□(一)月十六日、丙午(刀剣を造るのによい日)と正陽(よい時刻)をえらんで、よく鍛えた鉄で七支刀を造った。この刀はあらゆる兵器による災害を避けることができ、礼儀正しい侯王が所持するのに相応しいものである。□□□□の作ったものである。

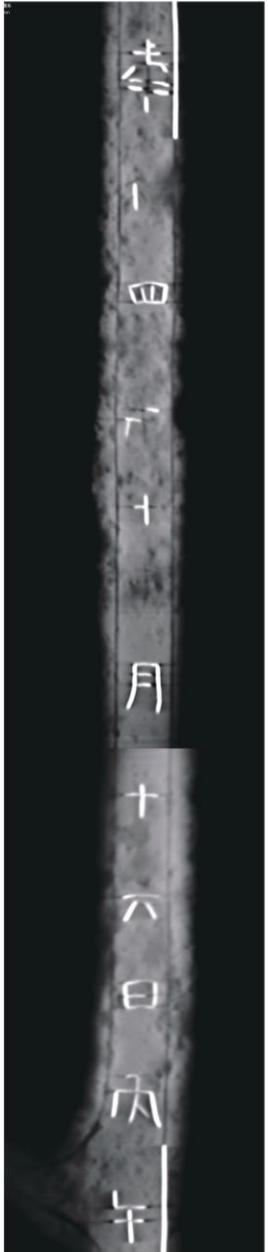
(裏) 先世以来、このような刀は無かった。百済王(近肖古王)の世子(近仇首王)である私は、神明の加護を受けて現在に至っている。そこで倭王の為に(この刀を)精巧に造らせた。(この七支刀が)末長く後世に伝えられることを期待する。

※銘文の詳細写真やX線透過画像については以下の文献に掲載があります。

村山正雄 編著 1996年 『石上神宮 七支刀銘文図録』 吉川弘文館

表面の銘文（X線CT画像）

泰和四年十一月十六日丙午



正陽造百練鑊七支刀出



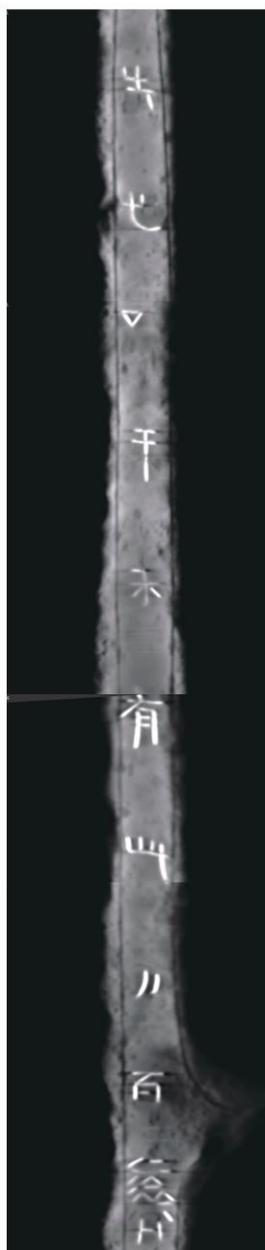
辟百兵宜供供侯王□□□□作



文字の判読については諸説があります。

裏面の銘文（X線CT画像）

先世以来未有此刀百濟



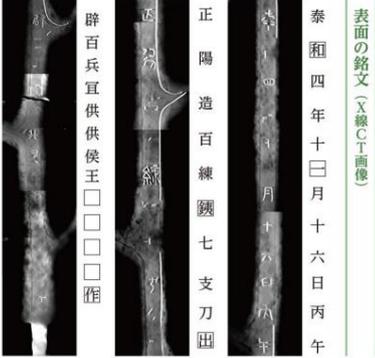
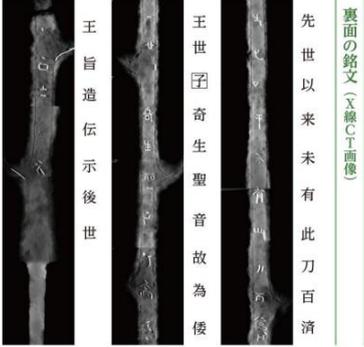
王世子奇生聖音故為倭



王旨造伝示後世



文字の判読については諸説があります。

<p>①</p> 	<p>②</p> 
<p>超国宝展会場展示風景</p>	<p>国宝 七支刀 古墳時代・4世紀 奈良・石上神宮</p>
<p>③</p>  <p>表面の銘文（X線CT画像）</p> <p>泰和四年十月十六日丙午</p> <p>正陽造百練國七支刀</p> <p>辟百兵宜供侯王□□□□</p>	<p>④</p>  <p>裏面の銘文（X線CT画像）</p> <p>先世以来未有此刀百濟</p> <p>王世奇生聖音故為倭</p> <p>王旨造伝示後世</p>
<p>表面の銘文（X線CT画像）と积文</p>	<p>裏面の銘文（X線CT画像）と积文</p>
<p>⑤</p> 	
<p>国宝 七支刀（部分） 古墳時代・4世紀 奈良・石上神宮</p>	

上記の広報用画像をご希望の方は広報事務局までご連絡ください。七支刀のCT画像につきましては、広報画像③・④のほかに、CT画像部分のみ単体画像6点（表面の銘文3点・裏面の銘文3点）もご用意しております。